うさぎ店長物語

よもの

あ、どうも。
わたくし、宇多木というものです。
とあるコンビニで店長などやっております。
現在四一歳で、二歳年上の妻と、二人の子供と一緒に暮らしております。
最近は仕事が忙しく、家族と過ごす時間もあまりもてないため、少し寂しい毎日を送っています。
あ、それで、わたくしの勤めておりますコンビニでのことなんですが、つい先日、バイトの学生さんが店内の商品を万引きしまして……あ、そうなんですよ、店員でもそういうことをする人がいるんですよ。で、彼にはうちの店をやめてもらったわけですが、その結果、今まで彼が担当していた時間を、代わりが見つかるまでわたくしが担当しなければならなくなったんですよ。まぁ、最近仕事が忙しいのはそれが原因だったりするんですが……。
えーと、で、なにをお話しようと思っていたのかというと……あ、すみませんが、これからちょっと、わたくしのつまらない身の上話を聞いてもらってもいいでしょうか？
あ、聞いていただけますか。ありがとうございます。
はい、それでですね、わたくし現在、家族とうまく行っていないんですよ。あ、そんな、それがどうした、って顔しないでくださいよ。確かにあなたには関係のない話ですが、わたくしにとっては切実な問題なんです。
そう、いわゆる空気みたいな扱いを受けているんですよ。わたくしが家に帰ってきても誰も無反応。おかえりなさいの一言もありません。昔は父親が帰ってくれば、子供たちが大喜びして玄関まで迎えに来てくれたほどですが、今では自分の部屋にこもったまま出てくる様子もありません。妻に至っては、わたくしが家にいるとなんだか嫌そうな顔をしています。結婚した当時は、一緒にいるだけで嬉しそうな顔をしていたあの妻が。
そういうわけで、わたくし現在家族とうまく行っていません。もうとても寂しいんですよ、これが。
ですがわたくし、いつまでもこんな寂しい生活を続けるつもりはありません。そこで、家族との楽しい生活を取り戻すために、ある作戦を考えました。
ふふふ、どんな作戦か気になりますか？
気になりますよね？
では……あ、すみません、どうやら仕事の時間のようです。あ、もしよければ、わたくしの職場を見ていきませんか？
最近ようやく経営が軌道に乗りまして……あ、そうで

すね、遅刻してしまいますね。ではいきましょうか。

いらっしゃいませ。

ここがわたくしが店長を勤めるコンビニです。

周囲は畑や田んぼだらけで、地元の方々には失礼な言い方かも知れませんが、とても田舎なんですね。ちなみにわたくしの家から車で一時間かかります。埃っぽい土地のため、毎日毎日掃除が大変なんですよ。バイトの方々にも時間に余裕があったら店内を清掃するように言っているんですが、若い方々はなかなかやってくれません。

え、こんな田舎でちゃんと儲けはあるのかって？

そうですね、これでも意外に儲かっていますよ。お客様の大半は地元の方で、朝は私と逆に一時間かけて町まで働きに行く方が朝ご飯を買っていったり、帰りに夕飯を買っていったり。この辺には最寄のスーパーがないので、主婦の方が買い物をして行くことも多いですね。学校帰りの学生さんが寄り道をしてお菓子や雑誌を買っていかれるのもよく見る光景です。

ところでわたくし、お店では「うさぎ店長」と呼ばれています。店員からも、お客様からも。きっかけは、うちで働いている主婦の方です。

「店長の名前ってうさぎに似てますよね。ほら、〝うたぎ〟と〝うさぎ〟で一字違い！」

で、彼女、近所でもその話をしたらしいです。その頃から、うちに来るお客さんに、「あなたがうさぎ店長？」とよく聞かれるようになってしまいました。今ではみんなの人気者です。おかげさまで売り上げの方もアップしています。

そんなわけで、わたくし職場の方ではとても楽しく過ごしております。ですがやはり、仕事は仕事。家庭が心落ち着ける場所でないのは辛いものです。

あ、そうそう、それで、作戦の話でしたね。

実はその作戦を思いついたのは仕事中のことだったんです。例の万引きをしてクビになった方が今まで担当していた時間帯を私が担当することになったのですが、その時間帯は夜勤と呼ばれる、夜十二時から朝六時までのものなんですね。私は昼間も仕事をしていますから、当然夜中の仕事は眠いです。仕事中なのにうとうとしてしまいました。そんな時に、来客を告げるメロディーが店内に流れました。

おっと、寝ちゃいけない。どうやらお客様がきたようです。レジに現れたのは面長でがっしりした体格の男性。どことなく顔つきがモアイに似ているので、わたくしが心の中でモアイさんと呼んでいる常連さんです。手にはなにも商品をもっていません。どうしたのでしょう。

「いらっしゃいませ？」

「……おでん」

まるで録音したテープに紛れ込んだ心霊ヴォイスのような声で、モアイさんがつぶやきます。
「あ、お、おでんですか？」
眠気と格闘していたわたくしはすぐには反応できず、おろおろとした動作でおでんの鍋からふたをとります。
「……昆布」
「あ、はい、昆布がおひとつ」
「……昆布」
「あ、もうひとつですか？」
「……昆布」
「えーと……」
「……」
「昆布三つでよろしいですか？」
「……うん」
ああ、よかった。なんとかモアイさんとコミュニケーションをとることができました。
「ありがとうございました、またおこしくださいませ」
モアイさんは昆布が三つ入った容器を手に帰っていきました。あのお客様は毎日同じ時間に来店するのですが、無口な方でなかなかコミュニケーションをとるのが難しいのです。昆布ばかり三つも買って行ってどうするつもりなんでしょう。大好きなんでしょうか？
おでんなら他にも沢山おいしいものがあるのに。おでんの鍋を見ると、大根、卵、厚揚げ、がんもなどがおいしそうに煮えています。あ、昆布がひとつも残っていませんね。それにしても、おでんたちはまるでお風呂に浸かっているようですねぇ。気持ちよさそうです。それにみんな仲がよさそうです。
ん、仲がいい……これは使えるかもしれません。気温が下がっておでんの売り上げが好調なこの頃、家族みんなで温泉に行くというのはどうでしょう。きっとおでんたちのようにうちの家族も仲良くなれるんじゃないでしょうか。
思い立ったが吉日です。最近のコンビニは旅行の申し込みまでできてしまいますから、すぐさま実行可能です。
しかし、そうなると仕事を休まなければなりませんね。一泊二日くらいはしたいですし。
というわけで、バイトのM君に頼むことにしました。M君は夜勤を担当していて、わたくしが担当しているのとは別の曜日に働いています。わたくしが休めばその分彼の負担が増えてしまいますが、頼むよM君、クリスマスはお休みあげるから。
さて、あとは家族にこのことを伝えるだけです。

「ただいま……」
玄関の扉を開けると、中からは人の動く気配。お、もうみんな起きているようですね。仕事が終わって帰宅す

る頃には七時を過ぎているので、当然といえば当然ですけれど。
「ただいま」
「おかえり」
わたくしがキッチンを覗いて挨拶をすると、料理をしていた女性が淡白に返してきます。彼女が私の妻の景子です。このところは会話といえる会話もなく、私が話しかけても冷めた反応ばかりが返ってくるようになりました。
けれど、あの作戦がうまくいけば、また昔のような関係に戻れるはずです。
さぁ、では食卓について、家族が揃うのを待つとしましょう。おや、でもおかしいですね。子供たちの姿がありません。
「おい、子供たちは？」
「みくなら出かけてます。俊介は寝てますよ。朝まで勉強してたみたいですから」
「けど、朝ごはんくらいみんなで……」
「あなたも寝るのなら、早く食べてくださいね。片付けるのが遅くなりますから」
妻は私のことを一瞥だけして、テーブルに食器を置くと出て行ってしまいました。後に残されたのはひとり分の朝食とわたくしだけ。
結局この日わたくしは、旅行のことを家族にいうことができませんでした。

「俊介、いるか？」
わたくしはコンコン、と息子の部屋の扉をノックします。なんだか彼の部屋の前に立つのはずいぶん久しぶりです。
「んー？」
中から返事がありました。どうやら起きているようです。もうわたくしには子供たちが普段どう生活しているのかがさっぱりわからないので、どう関わればいいのか迷ってしまいます。しかし、仕事に行く前にどうしてもあのことだけは言っておかねばなりません。
「父さんだ、ちょっといいか？」
いくら父親だからといって、勝手に部屋に入ってしまうのはよくないかと思い、彼の返事を待つことにしました。
「なんだよ」
おっと、息子の方から出てきてくれました。それともわたくしを部屋に入れたくないのでしょうか。息子はなんだか機嫌がよくないようです。
「実は父さん、今度家族で旅行にいきたいと思うんだが……」
「あー、無理。俺受験生だし。今年こそ大学受からなき

ゃなんないから、そんなことしてる暇ないの」
「あ、でも、たまには気分転換も……」
わたくしに最後まで言わせず、息子は部屋に戻ってしまいました。
受験……そうでした、彼は受験生でした。なぜ父親なのにそんなことも気づかなかったんでしょうか。
わたくしが落ち込んでいると、がちゃりと玄関の扉が開く音がしました。誰かが帰ってきたようです。様子を見に行ってみると、帰ってきたのは娘でした。
「あ、みく、実は父さん……」
娘はわたくしを無視して通り過ぎていきました。わたくしを見もしませんでした。
あ、ははは、なんということでしょう。いつの間にか、わたくしの家の中での扱いはこんな状態になっていたのですよ。
どうしたらいいんでしょうね。もうわかりませんよ。
でも、悩んでいる暇もありません。もう仕事の時間です。
行ってきます。
誰も応えてくれない家の中に向かってつぶやき、わたくしは今日も仕事に向かいます。

「あ……すみません」

仕事中、ずいぶんとぼんやりしてしまったようで、お客様がレジにきたことに気づくまでしばらくかかってしまいました。お客様はモアイさんでした。ぼうっとしている間に、この方がいつも来店する時間になっていたようです。
「……ピザまん」
いつも通りの、心霊ヴォイスのような声でモアイさんが言います。
「は、はい、ピザまんがおひとつですね」
わたくしは什器からピザまんを取り出そうとして……床に落としてしまいました。慌てて別のピザまんを取り出し、袋に詰めます。
「お待たせしました、すみません」
「……」
会計が済んで袋を渡しても、モアイさんはわたくしをじっと見たまま帰ろうとしません。
「あの、どうかしましたか？」
ひょっとしてわたくし他にもなにかミスをしたでしょうか。
「……どうした？」
質問したのはわたくしのはずなのに、逆にモアイさんが聞いてきます。どうしたといわれても……ひょっとして、わたくしが今日調子が悪いのはなぜかを聞いてきているのでしょうか？

「いえ、どうもしませんよ。ちょっとうっかりしてしまっただけです」
さすがに、家族とうまくいかなくて、とはいえず、わたくしは適当なことを言って誤魔化します。
モアイさんはそんなわたくしをしばらくの間じっと見ると、
「……あげる」
おもむろにピザまんの入った袋を差し出してきました。
「え、はい？」
差し出されて、わたくしは思わずそれを受け取ってしまいました。今さっき売ったものを渡されても、こちらとしてはどうすればいいのやら。食べろということでしょうか。
「……元気出せ」
それだけいい残して、モアイさんは帰っていきました。
もちろん、モアイさんがわたくしの事情を知っているはずはありません。ただ、わたくしが落ち込んでいるのを元気づけようとしてくれたのでしょう。
ありがとう、モアイさん。

「ただいま」
「おかえり」
家に帰ってきて、玄関で誰かが迎えてくれたことにまず驚きました。妻の景子が廊下に立ってこちらを見ています。珍しいこともあるものです。それとも、偶然玄関の近くにいただけでしょうか。
「私になにか言いたいことがあるんじゃないの？」
脇を通り抜けようとすると、今度は妻の方から話しかけてきました。
「え……」
わたくしは彼女のいわんとしていることがわからず、しばらく困惑してしまいました。
「俊介が言ってたわよ。親父が急に変なことを言ってきた、って」
ああ、そういうことですか。家族にとってわたくしの行動などなんの意味もないものかと思いきや、変なことくらいには思われるようです。
「いきなりそんなことを言われたって、あの子は忙しいんだからそうそういけるものじゃないわよ」
「ああ、すまん」
まったくその通りです。なぜそこまで考えられなかったのだろうと、あの時の自分を恨めしく思います。
「それで、どこに行くつもりだったの？」
「あ、いや、実はもう予約をしてしまっていて……」
「はぁ？」
「すまん」
睨まれて、謝る。妻とこんなやり取りをしたのはいつ

以来だろう。申し訳ないと思いつつも、わたくしの中には今の状況を嬉しく思う部分がありました。
「それで、いつなの、それは？」
「来週の、火曜と水曜。温泉」
妻は、はぁ、とため息を吐きました。
「いいわ、私が行ってあげる」
わたくしには、妻の言ったことがすぐには理解できませんでした。
「本当にいいのかい？」
「私だってたまには温泉くらいいきたいからね。あ、もったいないから子供たちの分はキャンセルしておいてね」
「あ、ああ……」
これは、これはひょっとして、うまく行っているのでしょうか？
わたくしは初めて妻をデートに誘った時のように、しばらく動けなくなってしまいました。

「こうしてあなたと出かけるのも久しぶりね」
目的地までは電車の旅となりまして、わたくしと妻は窓の外を流れる見知らぬ風景を眺めながら、時折揺れる車内で向かい合って座っていました。
本当に、こうして妻と旅行に出かけるなんて何年ぶりのことでしょうか。しかし情けないことに、わたくしはこういう時妻とどんなことを話せばいいのかわからず、彼女の言ったことにうんとかすんとか答えることしかできませんでした。
「ねぇ、あなた。どうして急に、家族で旅行にいきたいなんて思ったの？」
不意に、妻の口からこんな問いが出てきました。そんなことを聞かれるとは思ってもいなかったわたくしは、しばらくの間どう答えようかと考え込んでしまいました。
「なぁ、景子。家族から見て、俺はどういう人間だ？」
妻は少し考えると、こう答えました。
「はっきり言って、仕事のことしか考えていない人だと思ってたわ。だから、こうして旅行にいきたいなんて言い出すとは思ってなかった」
「そんなに意外だったか？」
「ええ。私はてっきり、あなたは家族のことなんかなにも考えていないと思ってた」
ああ、そうだったのか。わたくしは家族が自分のことを空気のようになんとも思っていないのだと思っていましたが、家族の方も、わたくしが彼らのことをなにも考えていないと思っていたのです。
「実はな、この前みくに無視されたんだ。ひょっとして俺、あいつに嫌われてるのかな。それにさ、俊介が受験だってことも、ついこの前まで忘れてたんだ。いや、覚

えてはいたんだよ、きっと。でもそこまで考えが及ばなかった。ダメな父親だよな、俺」
「ええ、ダメな父親よ、あなたは」
妻はきっぱりと言いました。しかしその表情は、わたくしを責めるようなものではなく、優しく微笑んでいるようでした。
「でも、あなたは私たちとやり直したいって思ってるんでしょう？　だったら、頑張りなさい。私はあなたのことを見捨てないであげるから」
「景子……」
目的地の旅館に着くと、わたくしたちは荷物を置いて、その辺りの観光名所を観て回りました。わたくしの知らぬ間に、妻が旅館の周辺の名所を調べておいてくれたようです。情けない話、わたくしは温泉に入る以外なにも考えていませんでした。
しかし、そんな妻との楽しい時間も長くは続きませんでした。夜中にかかってきた店からの電話で、急に呼び戻されることになりました。なんと、店に強盗が入ったのです。
わたくしたちは二日目の予定を全て諦めて、始発で帰らなければならなくなりました。
「ごめん、せっかくの旅行だったのに、仕事のために帰らなきゃならなくなって」
わたくしが謝ると、妻はいいのよと答えました。
「お店に強盗が入るなんて、こればっかりは緊急事態だからしょうがないわよ」
まったく、よりにもよってどうしてこんなときに強盗なんて入るのでしょう。それに、わたくしにとって最も気がかりだったのは、強盗が入った時間にレジにいたM君のことです。どうやら無事のようですが、やはり心配です。本来ならばわたくしがレジにいたはずなのに、交代してくれた彼が強盗の被害に遭ってしまったのですからなおさらです。
しかし、わたくしの不安はすぐになくなりました。店に着いたところでM君が出迎えてくれたのです。彼によれば犯人は夜、他のお客様がいない、店内にM君ひとりだけの時を狙ってやってきたそうです。しかし、不思議なことに被害はゼロ。どういうことなのかM君に説明してもらうと、
「ほら、あの時間になるといつもモアイみたいな顔のお客さんがくるでしょ。その人が強盗を捕まえてくれたんですよ」
あの人すごく強くって、犯人が空中でくるっと回転したんですよ。M君はやや興奮気味に語ります。
そうですか、モアイさん、あなたが助けてくれたんですか。この前のピザまんの件も含めて、今度会ったときにはあなたにお礼を言わなければなりませんね。

それから数日が経ちました。
今日は世にいうクリスマス・イブ。きっとどこの家庭も家族でチキンやケーキを食べるのでしょう。しかし、わたくし今日はバイトの方々が次々と休みを取ってしまったため、一日中仕事となってしまいました。M君に休みを譲ってしまったため、日付が変わっても働くことになります。
息子はセンター試験が近いとかで、わたくしと同じくクリスマスはあまり関わりのないイベントのようです。
娘は出かけたようです。ちょっと息子に聞いてみると、
「姉ちゃん？　さぁ、彼氏のとこでも行ったんじゃない」
初耳です。
そして妻は、
「今年はなにも作らなくていいから楽だわ」
とか言っていました。
結局また仕事ばかりのわたくしに呆れているんでしょうか。
「いらっしゃいませ」
ああ、そうそう、疲労と眠気に苛まれながら働いていたら、あの方がこられましたよ。モアイのような顔をしたあの方が。
「あ、先日はどうもありがとうございます。強盗を捕まえてくれたそうじゃないですか」
「……フライドチキン」
お礼を言われたことなどまったく気にせず、モアイさんはクリスマスらしいものを注文してきました。マイペースな方なんですね。しかしわたくしもそれで黙ってはいません。
「はい、フライドチキンがおひとつですね。でも、今日はお金はいりませんよ」
これくらいのことはさせてもらいます。
モアイさんはフライドチキンの袋を受け取ると、しばらくそれを見つめて、
「……あげる」
わたくしはどうすればいいのでしょう。
「……メリークリスマス」
いつもの心霊ヴォイスでそう言うと、モアイさんは帰っていかれました。わたくしの手にはフライドチキンの入った袋が残されました。相変わらずよくわからない人です。悪い人ではないのでしょうが。
せっかくもらったんですから、このフライドチキンは後でいただくことにしましょう。苦笑しながら事務所にそれを置きに行ったところで、来客を告げる音楽が店内に流れました。今夜はモアイさんくらいしかお客様はこないと思っていたのですが、他にもくるようです。
「いらっしゃ……」
言いかけて、わたくしは止まってしまいました。

「ふーん、ここで働いてるんだ」
「景子？」
物珍しそうに店内を眺めているその女性は、妻でした。
どうして？　なぜここに？　疑問が頭の中をめぐります。
妻はショーケースからクリスマスケーキを手に取ると、わたくしのいるレジにやってきます。
「これ、夫が帰ってきたらふたりで食べようと思って」
「え？」
「ほら、まだ仕事中でしょう。やることちゃんとやる」
「あ、ああ、はい」
そうです、いくら家族が相手でも今は仕事中なんですから、お客様として接しないと。
大急ぎでケーキの箱を袋に詰めて、妻に手渡す。
「仕事が終わったら、さっさと帰ってくるのよ」
「ありがとう……ございました。またおこしくださいませ」
妻を相手にこの台詞を言うのは少し気恥ずかしいものがありました。考えてみれば、彼女がわたくしの店にくるのはこれが初めてのことです。
「じゃ、待ってるから」
妻は微笑むと、ケーキを手に帰っていきました。
わたくしは彼女の後姿に、声に出して言うのは家に帰ってからでいいと思ったから、心の中で言いました。

メリークリスマス、景子。